

海堂尊『螺鈿迷宮』、『玉村警部補の災難』例会レジュメ

・著者紹介

海堂 尊：現在の肩書：独立行政法人放射線医学総合研究所重粒子医科学センターAi 情報研究推進室室長。

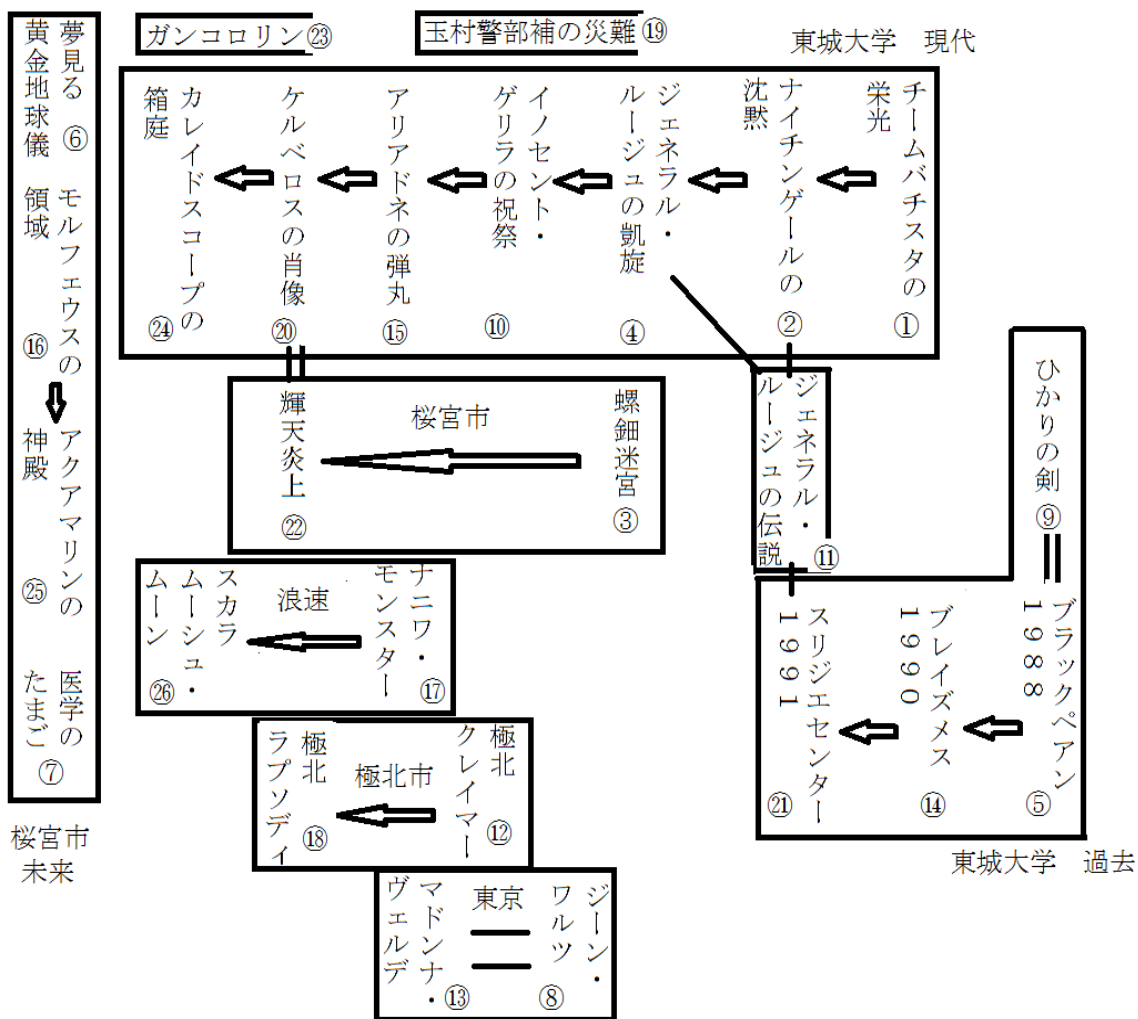
2005年に『チーム・バチスタの崩壊』で、第4回『このミステリーがすごい!』大賞を受賞。

2006年『チーム・バチスタの栄光』と改題して出版された。

2008年『死因不明社会』で科学ジャーナリスト賞受賞。

・桜宮サーガについて

以下図を参照。



舞台は基本、桜宮市となっており、特定の主人公は設定されていない。

作品自体は独立して成立しているものもあるが（序盤）、あとになればなるほど人物相関図の関係（細かすぎてレジュメには書かない）で独立しているかどうか微妙なものもある。

作品群の性質上、あとの作品から前の作品へと読み進めてしまった場合、その作品の核心部分について既知となっている場合が多々ある。コンプリートを目指していくなら、絶対に作品刊行順で読まなければあとで損をする。

各個作品群についてネタバレにならない程度の軽い解説

・東城大 現代

いわゆる、田口・白鳥シリーズ。不定愁訴外来の田口公平と、厚生労働省大臣官房秘書課付技官及び医療過誤死関連中立的第三者機関設置推進準備室室長の白鳥圭輔が、東城大で起こった現在進行形の謎などを解き明かしていく作品群。

・東城大 過去

各タイトルにもあるように、主にバブル期の東城大が物語の舞台となっている。医学生時代の田口や東城大学医学部附属病院オレンジ新棟救命救急センター部長として現代編に登場する速水晃一、東城大学医学部附属病院放射線科准教授となる島津吾郎などもここで登場している。

・桜宮市

今回の例会で扱う螺鈿迷宮と、東城大現代との強いつながりを持つ輝点炎上の二作で構成される。東城大現代編を読む際には、作品の従属関係が強いので、読んでおかなければあとあと単独の作品として理解不能になってくる。よって、現代編の読破には必須の作品群である。

・浪速

現時点ではナニワ・モンスターのみの作品群（スカラムーシュ・ムーンは今年七月に単行本化）となっている。あとで解説する東京部門と並べて作者は「海堂シリーズ現代篇」としている。ナニワ・モンスターでは新型インフルエンザがテーマ。

・東京

主に作品群としては、産婦人科医療、特に代理母問題や、人工授精について扱っている。ジーン・ワルツは映画化、マドンナ・ヴェルデはNHKでドラマ化されている。

・桜宮市 未来

東城大現代編『ナイチンゲールの沈黙』に登場した佐々木アツシを主体とした作品群で、SF的要素であるコールドスリープなども登場する。但し、このコールドスリープというのも全作品群中に存在していたある矛盾点を解決するためにつくられた設定であり、やはり東城大現代編を全く読んでいない読者と読んでいる読者では大きく感想が変わってくるのではと個人的には思う。

・Ai について

Ai とはここでは人工知能 (Artificial Intelligence) の事ではなく、死亡時画像病理診断 (Autopsy imaging) の略である。

なんやねんそれ、という方が多数だと思うので、ここで Ai 講義を簡単にしておく。まず、Ai そのものについて説明すると、死体に CT や MRI などの画像検索をかけることによって、死体の死因究明を行おう、というものである。

現在、死因究明の手段として圧倒的な認知度を誇る解剖 (特にミステリ世界では死因の究明がある特定の作家以外、ほとんどこの解剖に頼りきりである) が現代日本では瀕死の状態にあることから、現場が真の死因究明手段として利用していこう、ということになっている。

海堂尊という作家は、もともとこの Ai を広めていくための手段として『チーム・バチスタの栄光』を書いた側面があるので、例会でもきっちりそのプラス面について説明しようと思う。

次ページに示すのが、解剖と Ai の比較表である。

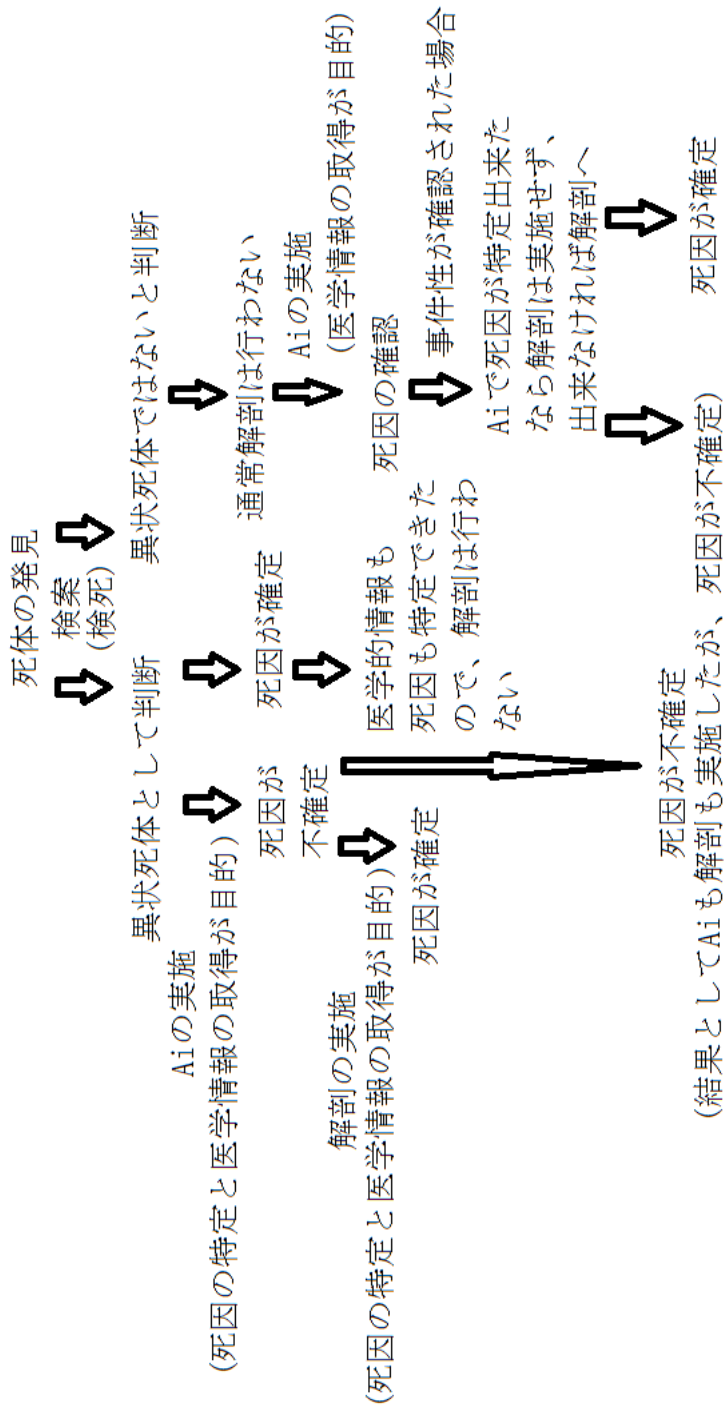
海堂尊著『死因不明社会』を参考にしているので、Ai 側からの視点ではないかと思う人もいるかもしれないが、これでも結構フェアに比較検討している。

この本が書かれた時点では、著者的には、解剖が上手くいっていないから、それを Ai で補ってあげればいい、というスタンスだった。実際問題としてその方が現在進行形で病理学に携わっている人との軋轢の回避が出来ていたとも考えられる。

しかし、そのあとの桜宮サーガや、『死因不明社会 2』の方にいくにつれて、解剖はもう機能としてダメになっているから、Ai を主体とした死因検索システムを構築しないとイケない、という主張に変わってきているとも感じられる。

そうなってくると、ここらへんで生じてくるのが、解剖と Ai の併用を考えていた著者の当初の案である。あとになればなるほどここら辺の理解が重要になってくるので、これもまた簡単なフローチャートにしておく。

評価項目	Ai	総評	解剖
検査のしやすさ	★×8	Aiの圧勝	★×1
遺族承認の得やすさ	★×8	Aiの圧勝	★×1
コスト	★×8	Aiの圧勝(CT+MRIで5万円程度、解剖1体当り25万円程度)	★×1
スピード	★×8	Aiの圧勝(AiはCT, MRI併用で1時間前後、解剖は作業に3時間、報告書提出まで1か月以上)	★×1
設備設置率	★×8	Aiの優勢(解剖室設置より、CT、MRI室設置の方が容易)	★×3
マンパワー	★×8	Aiの圧勝(解剖は病理医か法医学者のみ。Aiは画像診断医だけでなく一般臨床医も可能)	★×1
労力	★×8	Aiの圧勝(Aiで診断以外の労力は、遺体の運搬ぐらい)	★×1
エシックス	★×8	Aiの圧勝(遺体の損壊を伴わないので、Aiには倫理上の問題はない)	★×1
医学情報	★×6	判定困難(情報の質が異なる。情報量としては互角だが、マテリアルを病理学的手法で解析すれば医学情報的には解剖の圧勝)	★×6
診断確定度	★×3	解剖の勝利(但し、「解剖検索が行える領域については」の条件付き。解剖は検査不能部分が多く、圧勝は宣言できない)	★×8



さてと、ここまでまとめておいたのでこれで分からなければ恐らく私の説明がどこかで飛んでいたということになるだろう。
次からやっと例会本のところに入るので、ここまでの話で理解できない点があれば、ネタバレにならないように解答する。

このページ以後は、例会本のネタバレを含みます。

・螺鈿迷宮

主としているテーマは、終末期医療における QOL の問題や、終末期医療に対する病院の立ち位置など。螺鈿迷宮はまだ解剖ありきの Ai 実施を念頭に書かれていると思われる。

そして、解剖の限界部分、死因検索ツールとしての欠点について。

ミステリ的要素の簡単な列挙

- ・碧翠院と桜宮院における、立花善次の捜索
- ・異常なまでの、院内における死の加速
- ・探偵役としての、白鳥・姫宮、そして天馬の動き
- ・「解剖」という、ミステリにおける圧倒的な死因検索ツールの逆説的利用
- ・葵の過去と、立花善次行方不明に対する解決
- ・真の死体による、死体のすり替え
- ・——そして残った、桜宮家、でんでん虫の禍根
- ・玉村警部補の災難
- ・東京都二十三区内外殺人事件

Ai 関連的な情報で云うと、監察医制度の崩壊から生じる死因究明システムの崩壊がテーマ。無論、東京都二十三区とそれ以外という括りは、霞が関と地方、という対比を示している。

ネタバレではない小ネタとミステリ的要素の列挙

- ・セント・マリアクリニック
- ・スカイレストラン『満天』

- ・二十三区内の死体と、それ以外の死体という括り
- ・「心不全」という名の死因不明遺体
- ・医者は検案、警察は検死、というささやかな法律用語の違い
- ・二十四時間以内における死亡診断書の穴

- ・青空迷宮
- ・四兆七千億分の一の憂鬱

読んでいる人がある程度いたら触れます。去年度読書会を実施しましたので。

- ・エナメルの証言

桜宮巖雄亡き（碧翠院亡き）あとの桜宮市での出来事。

Ai 的要素で云うと、Ai という死因究明システムにおける欠点部分について。

先程と同じく小ネタとミステリ的要素の列挙

- ・ダモレスクの剣
- ・身元不明死体を用いた人間のすり替え
- ・Ai における、前例データの不足と蓄積

参考文献

『螺鈿迷宮』

『玉村警部補の災難』

『死因不明社会』

『死因不明社会 2』